

# 印度佛教固有名詞辭典の出現

美 濃 晃 順



輒近、佛教學の進運は實に目覺しいものがある。しかし學界に通じて要望せられる辭書類の編纂に就ては、未だその消息を聞くこと稀である。皆無きいふのではない既に織田氏、望月氏佛敎大學等の編纂した一般な辭書もあり、近く高楠博士の巴利語辭書、萩原博士等の梵語辭書なきの計劃あることも聞いてゐる。しかし後者は言語學の範圍に限定せられたものであり、比較的應用の利かないものである。又前者は近代佛敎學の精神並に態度に可なり逕程のあるもので、我等に取つては何となく縁遠い感じがせらるゝ。若し力用ありすれば支那佛敎以降の研究に關するこゝで、少くも印度佛敎に就て近代的研究を目論むものには、「ないよりもまし」の感じの方が強い。その點では同文館の哲學大辭書中に收められた佛敎項目中の幾分が、僅かにその渴を醫してくれるこ

いつた方が適切である。



かゝる佛敎學の現状に於て、我等は今度恩師赤沼教授の手によつて、印度佛敎固有名詞辭典の發表を得たことは正に乾天の甘露雨たるの喜びである。この勞作は、實に六號横組二十三字詰四十行二桁組を一頁とした(千八百字)八百頁(一千四百五十萬字)から成る四六倍判の大冊子で、收容語彙四千五百を超え、一語の爲に十五六頁を占むるものも少しとせず、これが編成には二十ヶ年に近き歲月を閲し、漢巴梵等の殆ど全部に近い典籍も、更に近代學徒の精究までをも通覽して、取るべき資料は細大まなく取られたといふから、我等は内容を檢するに先立つて、先づその驚歎すべき不屈の精神と勇猛の努力の前に、尋常ならざる畏敬を覺えずにはゐられない。目今猶終部の原稿の作製も、煩鎖なる校正の閲見に努力し

てゐられるが、假令校正中ミ雖も、新資料若しくは學說に氣づく場合は、躊躇なくこれを追編し、このために印刷組更へを生ずることも稀ではないといふから、いよいよその精研の努力に畏服せざるを得ない。



内容は支那文献に於ける各種の音寫や、譯語をばすべて原語に統一して、これをアルハベット順に配列してあり卷末の嚴密なる索引によつて、いかなる音語譯語からでも、自由に所要の項目を探れるようにしてある。收載の項目は、固より固有名詞に限られてゐるが、それも、歴史的な人名地名乃至家畜の呼名や、寺院堂塔名から部派の名稱にまで及んで居り、更に神話的傳説的な物語に表はるゝ上記のもの、及び神名鬼名地獄名等までも一を漏さず収められて居る。たゞ割題に（原始期編）ミせる如く主として在世佛教及び部派佛教に關聯するものゝみに限られて居るのは些か物足りないが、これは或は續いて（大乘期篇）等の編纂を決意してゐらるゝためかも知れない。



解説様式は、先づ原語を以て項目を示し（五號肥大字）、次に六號にて（傳、人）（國）（王）等ミその種別を概示し見出項目が巴利なる場合は相當梵傳を、梵語なる場合は巴利語を示し、更に漢譯傳をば、音寫、音略、譯の三大別にて示してある。例示するに

Katamoraka-tissaka (比) *[Skt. Katamoraka-*

*tisraka; 瞿曇; 鞞陀譯洛迦底沙, 鞞陀譯洛迦底酒, 鞞陀譯*

*洛迦底酒, 迦陀務陀底沙, 迦虛陀底舍; 瞿曇; 鞞陀譯*

*洛迦, 迦留陀提舍, 迦留羅提舍, 迦留陀帶, 迦虛底輪;*

*瞿曇; 鞞陀, 時迦說]*

といつたふうである。而してこれに、[1] [2] [3]……等ミ、資料の類同に従つて豫め分類彙集して資料記事を掲載し、その出典に就ては逐一にその典籍名ミ頁が指定してあるから、學者はそれによつて更に本典に就てその記述を精研するに便である。殊に漢譯大藏に於ては一々縮藏ミ大正藏の丁數を掲載してゐるのは、便中の便でもあるが又恐るべき大努力であらねばならぬ。



解説の方式は大體は取意的に平叙されてゐるが、特に學理的立場よりの必要の存するものには、原語の方は逐語譯、漢譯の方は原文のまゝを長々引用してあるのも親切である。しかし評者に取つて最も嬉しく思はれたのは、著者が著者自らの私見を以て原文を批評し案配したり、若しくは資料相互の關係に對する學問的批評を加ふることを、出來得る限り避けようせられたことである。

これは初學者等には、或は徒らに資料のみを羅列せるものとして頼りない感じを與へるかも知れないが、實際は上記の概別があるのであるから、より以上の批評を取捨は覽者の自由な採量に委ねられてあるのであつて、損はれてない原意を汲み得るこいふ點に於て、頗る慎重な態度をいはねばならない。



この辭書を手にして暗示せらるゝ學問上の方向を探索の領域は頗る廣汎である。書名は固有名詞を限定せられてゐるけれども、學徒がこれが必要とする所以は、固有名詞自体を検索せんとする場合よりも、寧ろ、固有名

印度佛教固有名詞辭典の出現

詞を通じて所要資料を検索せんする場合に於て、より有意義であり、より高價な本書の生命を見出し得るこいだらうと信ずる。試みに阿闍世王 (Ajātasattu) の項を引いて見るに、そこには漢巴の阿含や律部の記述を始めとして、諸の本緣譚や觀無量壽經大乘涅槃經等に亘つてあらゆる文獻が列示されて居る。よつて聖典文學の研究を旨とするものは、これによつて文獻移動の跡を歴然として知り得るに共に、各種の新たな聖典文學に於ける彼の地位を見出すことが出来るであらう。又聖典史學に志すものは、これによつて文獻の新古を判する有力なる暗示を掴み得べく、教理史を自論む者は、彼此思想の轉換に關與せし多方面の資料を、一目の許に整理し得るこいであらう。かくて本書を、教會史、傳記學、聖典史、聖典文學、教理史、教理學等、各方面に亘つて多大の援助を惠む寶庫と稱するも過言であるまじく、又近代佛教學の唯一の暗示的指南書といつてもよいと信ずる。



本書に就て猶いふべきことは多い。しかし最後に唯だ

一三筆追記したいのは、既に五年以前に豫報せられた英國巴利聖典協會のステード氏等が編纂しつゝある筈の同様の名の辭書のこゝである。我等は、久しく學界がこ

の出版に心を繫けてゐたこゝ、而して右ステード氏の豫約に對して異常なる期待をかけてゐたこゝをよく知つてゐる。然るに今我が學界から彼に先んじて本書の出現を見たこゝは、著者の辛勞を謝する前に先づ我學界自らの誇りとして慶すべきこゝではあるまいか。評者は何がなし、この祝福すべき大出版に當面して我が學界に到來せる黎明の曙光に眩惑せずにはゐられない。恐らく本辭書が我が學界に對して投げかけかける暗示に富んだ呼聲(上記の内容)は、必ずや遠からぬ將來に於て各種の新

研究を助産せしめて、我等が憬がる、近代佛教學の大成の日を近づかしむるこゝであらう。



本書は四六版八百頁を細字の而も困難な字句によつて盛りこんだ大冊である。それだけに出版者としても印刷者としても多大の犠牲を承知の上で引受けた大事業であるといふのも當然なこゝである。従つて定價も二十五圓にふりつけたといふこゝも無理からぬこゝではあるが、しかし初版は百六十頁宛の五分冊として刊行し、五分冊で十六圓の特價(初分冊四圓後四冊參圓宛)で頒布するといふから、學生等の購買力にもふさはしい。

## 印度佛敎固有名詞辭典に就て

西 尾 京 雄

一、本辭典の地位、日本に於ける佛敎學の研究はこゝ、

四五十年以來、泰西學者の研究の影響をうけてその進歩